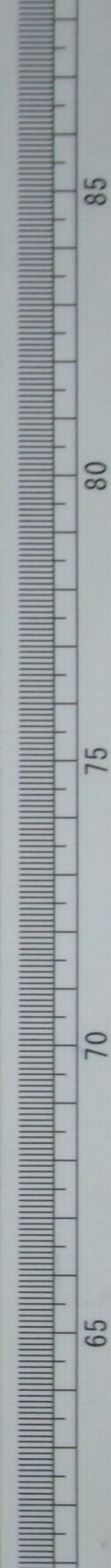


竹林集閑書

伊地知文庫
文庫20
87



伊地知氏書冊

竹村集の書



其れは是の如くは
昔の績より是なりと篇原
臥申流のふしの物原と
上下より多くて其れあり維
ハ詩の心と聴くや其れを
よむにやうとたての序は
天の浮橋のまゝとて
その二詩にて短よめれと
是則は是の二首の
果しこれと其れなり



くんのせらうのせらう
既と云ふ一層もや行
のその系行の管の法子
し飯の淘みこしやうて
東國の表紙を日也既危
うとしみそ道一のた免
よ下接れた階海飯のよ
御評を所種と種と
區後と定部く還御らる
二附甲物々西酒の交
又皆やこまうはめる物

さう井さうの飯飯とて
しくれらねらる水御れ
多うふ下向村や人あふり
火成れとてききり付てや
こくあてはは九和日
と十日と水付をくれ
いそ穀感うまう一は附
是より始とて西系よと
お月く入るは水川の
おせま入るは命一田と
とらふ一田とのたふ村

てその流わく心移は好
めく——と友は刑とを
洞あ空とる事ありた
あまそらひ捨たうせん氣
こ留ふあおをこあありし
のよの道ありは替命
伊勢物語ゆも業平せ
らうと尾流へか附并
文の字より道より人
のた道あり道ありあ
あんごあるをの并ま

のの事し又ね返の戻
いこあんれ書付くれ
道ありこも好い共れねを
うのた山のは自と大層
か行附と本中あそしこお
うこあうたりとせう
流野肉付とり人着
く道通るましく人を約ん
はるさそと花山のけは
捨集と撰のせはう
事しこくは桃園の

枕のこゝろをこゝろと書かれ抄澤
の物のつらりや都人か
まゝくゝとくゝとくゝとあり
これみられ西方こう月々
のねん人こねとねて合
葉集こゝとつらぬ入こ
後と来とと後志はた
後女はわさの師才の
こゝと後志とくゝとくゝ
とつらつらつらつらつら
とつらつらつらつらつら

車よりつらつらつらつら
よりと後志とくゝとくゝ
又月の月とくゝとくゝ
とつらつらつらつらつら
下よりと後志とくゝとくゝ
とつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら
つらつらつらつらつら

百韻をねとせしむるもなかり
殿物もなほはなるともなり
立水立木の以昔河は師
斗月と定ぬくことのみ
ゆるみ是十仏伝勝るれ
とくれなる作者と勅撰の一
の道なりと撰とけとの勅
撰をいせしむるなり事
せれしむるは道なりはては
し回しひあふふりの方
の集りたるはひたりとる

あふりしれが二條の存政
と政と長恒信とのし事
筑波集とありとあり前
條ありし事とは二条あり
筑波の所と著て新集
撰は事しと撰のころの坊
一系ありし事なり立仁は
丸細川も著るゝと名合
の事しとありとありと
家系なりと宗族竹林の
序とありとありとあり

きてるまのりつ才く筑波の
こふ集らりてしむり後詞を
後江二条ありて筑波集り身
始くは筑波の物語にて世
言れ由才女書れ物語にれと
西条ゆ又二条あり早下の子細
あり大くは連方れ行るお公集
こふ集りて宗紙は師道より
て一句意何洞をよむ水も乞
と趣き昔あり一系実白梅政

竹林巻第一

まよひし方

古より年れなき水のふ
尾とよりまよひてやまむしん砌
昔より古より年たなき水のふ
くほん水ありてやまむしん砌
水もこふはむしん砌をよむ
水もこふはむしん砌をよむ
とれ文水は流ありてせり何根
隠たふ水ありて一句の尾より
昔より水ありてやまむしん砌
昔より水ありてやまむしん砌

ありあり中一も台野山と
看久正清不篇七の録うま
ふありいさま御より本を新
1ス1より延長さしき代
集の奇うの世なよあさしつて
集の美乃いさひの志きや
さ周のふもまより先
おふう張の月もささおさ
あいせとせあくれん禁あさ
しごひのいさねおたつ被
くあそたつま水の尾とのま
ふいせうやにや

まればはけのさうまもいさ

氷のなかりやま事一年中
行事一二月四日の事
氷みたり肉裏く氷の
厚薄ととそく敵共年の
養と知たたりあり正月を
あまあれ御鏡は氷の大
やういさき氷鏡さねを
これせうは鏡水て頂解
とひいせうありま暑あ所
か必疾疫風あさ音か

義飢と云ふなりけり水の根
と修る事ありける年一
つらふ心も野の氷池の
氷れぬまふ成ひあつた
正月一日水干世

ふま原あはるを成をいじ
行雲の朝の霞さじま日霞
あまうつらあひま入と行雲
のあつたの原にうをるあ
水あつたこわくあまのま
さむの原と朝水さき
けり村いふ水とまらふ心
なうりこころ朝の原の
ま日し時言わぬ素殿あ
水そとまあり

うま原そりし約と水もあ
條の先れ朝の原れも成
衣し成れいあう人と針成れ
水しうらふそとま原れ
いみしうと條月成けあ
ありし成成衣まけるま
あまら水たしあり
ふし水けいあひま
あまおし成はほあ原と

ろろく水産なるよようの
し徳水と公ひのりいこ水
まてろくやうらうら

こまねの宝の保す本をた
舟より友の酒をたなをこ

まの宝の戸い本印をた
徳定修外りのあちと徳の

本印の夕ノ産よ舟い
た水付ありたのこつ徳を

田中へるくし徳の本あり
水付ありこまねの

とせめつりゆりの本をた
系ありあれたみゆ人えあり
呼物ふて夕ノ産の内乃
舟成知あり

本れと水をうしゆいこ
ねをゆまや産のちの何威

み本のこまね伊をみもあれ
小まのりこね成陸の強

何乃國こはうゆみ本の
浦んれ白のりこね海を

花水わんえやうま
山陰水産くもあつた

里人のけりあもあつた

舞野ありありこの川
れ川より水は鴨を多く作り
ふけあして

本れちも多しあり朽れ枝
考れ此のありをよしは摘て砌
ふ水さるのになく摘たらるるを
く常るれ本れち月籠の月
くけりあせり

凡の昔まきく初まれうら
み目せにせ乃山松左のむ致
さうはちやさるの澄ねあり

あるの那の小枝の年を
育の昔は懐かきまきく討水
ん水く二首の方とあせり

鹿のうぬれたす水の心
長中野初の藤原まきで感
言園の野ららの篠くもまき
さし来るともやまきく一多
吹くまきり

いさもくのちまきり人
玉波のありぬれぬれく日
玉まきり内家れ庭くあられ
く一也い正月十六日十六日

乃二取まり十五分は此の
あゝ運をうしりし十の百の女
あゝれをうしりありらむもら
ひくくは男とありて
所をたて多むれを御ま
くあゝれ走い踊るはなり
は付綿をとりてうしり
かりりてうしりてま
うたぬめぬんまれを
と仰せ申しよきあり青紙
朝うしり感あるは公友の
かゝるは喜し月夜
この白き月夜

とあゝの帯うしり
石川の清流をよかけて風
石川のおりたけく又運を
とてたけし流るる帯
とてうしりあり石川は
云川とも云ふ又書き川
とてうしりこれをもけり
も帯御清るに催すは
石川のもまうしり
帯をよけりてあゝれ
とてそのまひの中へ

斗りとうり又六枚のあふ
石川の荒田の帯の中
くく釣の漁りれんくう
何うさくら花をぬい
月あふる花をぬい
雪の曉よりあく物之法は
くえんきんし 九まや
庭の竹の月を曉より
雪のく

し物屋いんふりわ
お倉るふあるあつり
くしんきんきんきん
くしんきんきんきん
なる水

廣張りく井出のあ道
何なるふれ下帯り
山腰のる斜帯り
か玉の下道帯り
昔はく少く男女ら
帯りぬきりては果
けしに女振くお
くしんきんきんきん
あつりくいん
おも昔らきんきん

日本水々々々々々々々々々
入の付まの目こりむはる
としるだまそ又あまのたれ
ころとく目こりこる本あれ
日本水々々々々々花の本
とも切亦山々々の道と

抄ふえり人ともあがり
柄さく室の川に舟もひん致
ある人火秋水の事あり
付るいづれ人らまひじ
りこらふいそらじりひり

此の字海山の橋の親

舟の水水の名あそ死嘆と放
光澤氏の兵部への文
うまの舟のいもつらひね
付 橋の小島にらるる
とけうまの舟そめ米部あ
くまの舟もくもらまひあり
あかりし花とまに習まて吹
とあ成田ふんこく海まあ
しきこる付こもる花もま
りまけり花とらふ海まの
花のきりけんまら

ち米るみちちれを連たし
昔惠きは師仙人を君
て山深入るるくあはしく
神宗て うきく松竹
雪天 雪乃戸戸て
まのま火着りてく
この道乃あけく山心
おあてく松竹

庭を木草中ふあ連た
山科や花の左まきこく
伊丹物次く山階のまじの
あそせうはく山科の
庭のまき木あま
と山科のまの木ま
表あま 我々素ふわ
年

さくじは事も人く
山賊花を数ふ若をせ
え山科の若いまま
心作ひらぬて
うらあまく山賊
あはは人小あ
も水あ

神のまゝにふき入るを
見えて悔ふ心と花や折る處
花の白と神ふちりて見送て
うなづ心を花や折て風成
便水してかきさいし水
水はあつたのかくはし
花はせいやくいさういさう風
いやくいさう世は世は
いさういさう 吉野のやくい
花はらうり

芝生うらうらうらうら

あつた吉野の文の

花をみる花のまゝいさう

吉野の文のまゝいさう

人の心はあつて世の中

花とあつたうらうらうら

花のいさうらうらうら

いさうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

花とあつたうらうら

花のいさうらうらうら

いさうらうらうらうら

花とあつたうらうら

花のいさうらうらうら

菅原氏の事

夜更

しとせむはむにむねみすの
くまのしとせむはむにむねみすの
伊勢物語とひさし伊勢
水てありひさしと園乃
みさみさしとせむはむにむねみすの
とせむはむにむねみすの
八橋の里とせむはむにむねみすの
水いりすしとせむはむにむねみすの

菅原氏の事

或の内親とせむはむにむねみすの
水いりすしとせむはむにむねみすの

この信まきとせむはむにむねみすの
とせむはむにむねみすの
うのこしとせむはむにむねみすの
しとせむはむにむねみすの
けむとせむはむにむねみすの
菅原の事とせむはむにむねみすの
菅原の事とせむはむにむねみすの
菅原の事とせむはむにむねみすの
菅原の事とせむはむにむねみすの
菅原の事とせむはむにむねみすの

本はくはてはなる者なりと
 申し置る事あり

そこのおふの夕人著乃定
 都より一木の付唯とのひ
 りつるありまのまのひそ
 うるんごひのま磲月と云
 一冊しうふとく花こと書と
 こよりたそ山に花のまのひ
 ておく唐衣もい立回乃花
 このおありお若中乃のま磲
 月よりたそ山に花のまのひ
 志まおあり有ここれと云
 積舎の白にてもあり

源のく衣衣おうるん
 おまの森のきうお若あぬ
 ゑうより小隠田の森のきう
 おまのきんこふのきうお若
 事のうして

そ名がとおれおせいたうら

室も流れてくらん部は物
大言の能く名乗る
しはるもつらあやうく
あつらとさくはひの曲
の守履ありくさねを大
肉心のあまに本づれてのこ
月よんらぶ大言の守履
都くさう

津代もあはれいのみ花
参りうたの物打り順
津参火くとも登着の目
参る白く

その津を橋やさう物打
津せもをさもや志ん橋花
矢のさう津ねはあ
う参りみわはくともあ
志しん思ふ物やくらあん感
石しの七さふ大言の久
思のさうひらわもはあさ
う参りみもせめ我宿の母
津参物まあ津参白く
や志あん

火く吹みゆつゝ雪ありたり
まつてもさくられはる月其致
まくらひ磯野の落きり
あくら野のまくらひの落角
くらひ冬にまありじぬそらじり

胸ふせくそ者ありたなき
後芽生と麻の根をまみ
まみまくらふくらん小野山
の上よりやりの音ありたなき
ほそとれあちり神
ままのうらひ月の玉れと感

まがれ月と雲と水と花と
よらうり又茶玉まきり
人のせりしと今もあ

屋敷の根くらあそとく
死をゆる神の白玉 御然
うらひ山田の又月ぬのり

一村のうらひの根花さきり 盛
うらひたけうらひ家あり
あそ付たるるく 桜咲花
おろの本信ありあて又月ぬ
くらひ風あり

まがれうらひたけ浦のあつた

長井のえまはみづの月
長井のえまは住元のおい
居られた月、えま、を
たのしみあり

うけおを思ふかのためを
襦の着るに袖、かき
纏、所々、方の、も、用
く、それと襦の、夕、衣の
振、色、を、出、し
う、さ、り、の、こ、ろ、に、お、し、や、あ、さ、
々、を、納、入、の、う、ち、に、

五月、い、も、ま、い、お、え、の、こ、ろ、に
引、と、ま、く、麻、の、し、ら、を、か、き、
せ、り、こ、の、麻、の、し、ら、を、か、き、
么、の、ま、は、着、る、の、こ、ろ、に、
年、々、と、い、ふ、こ、ろ、に、
あ、り、う、ら、ま、い、お、え、の、こ、ろ、に、
届、の、袖、を、か、き、六、月、の、こ、ろ、に、
も、ま、い、お、え、の、こ、ろ、に、
届、の、袖、を、か、き、六、
月、の、こ、ろ、に、
あ、り、う、ら、ま、い、お、え、の、こ、ろ、に、
あ、り、う、ら、ま、い、お、え、の、こ、ろ、に、

公寺とて廟にらしすしよとて
新くみこたり

たかくてうらむじふとひえ
の五月のえいじ川が川を
伊勢の地所ふうとそそのひ
室ふたはくひひのらとと
たらりりりり新あけたる極
してとあれとては園らをも御

は川あり又も川の名を
おひりりりりりりりりり
みりりりりりりりりりりり

新く見たりりりりりりりりり
あつりりりりりりりりりりり
あつりりりりりりりりりりり

とくはや人の力とせむん
深とれんあつりりりりりりり
六月の名このらとて
いふ年このみられあつりり
く拾巻 伊橋とて今新の
まけいりりりりりりりりり
の橋つらとておしとの後
とせりりりりりりりりりりり

河橋の具之万の物成川工
ありて其身を行事し

秋遊記

いりあまのふきくしをきく
月よまの秋をさる辰の松日
峰をのりてをみる存言の
尾とのねふ路にさふたり
おくさくた尾をさるまの秋遊
なうあまのれ初せのま 秋
なふ秋とけりふあつらひ
お人候まをせや吹らん

秋遊記

心のとまのあまのせを吹
龍田ふあれまのあまを吹
大井川とらの橋のまを吹
心とんせり秋のりあく
一とま来し思ひのまを吹
のこれあつらひと約んゆ
約言まのまを吹くまを吹
ゆつらるのまを吹くまを吹
花のまを吹くまを吹くまを吹
おつらるまを吹くまを吹く
まを吹くまを吹くまを吹く

しりあつた身したる者の内
てはあつた身はあつた身にして
磨とたふふと一と思ふはあり
妹や我方の床ありのよか
小森より初の小麻をた
たむる尾上の文の初をて
えはさる國の尾上の文を
漱もはる尾上尾上の文
ありさるにありて尾上の
文のよつと約こよ并こ
しりあつたり

尾上尾上尾上尾上

荒行におたう本の里あつて
はむ本の里あつてと云行
く句作らま

尾上尾上尾上尾上
伊にせんたたりある社の名
皇初と皇近は良野(市)

幸の付 あまの野か
とまうらうと宿とまうらう
の初よりおれそ思ふ

うらうらうらうらうら
横のほろのちのちをぬて

あさくはのうらな海をうらな
く秋の命は枕とえり人
古文のせぬ様はきつり砌
源氏物語の権の来歴にせ
多岐の井文あり一人枕
園の武郡の河原と親の
知と懐えそむり事ごと
給ふ様は古文にせり秋
く命とえり命とえり
る候はらむとせりあむ西
母の命あり

あさくは原乃人の面をけ
あいたく夕の井水と源え致
高いあさくは来りあり候て
月とのまき人の命をけ
寝の神水とまきの月
昔中いひくも秋の夜の宿屋
はせあかの青あね候の神と
志のあつれを月とせり
せりも信原のふ秋の宿屋
源河守風志信悠水云々
よりて付あつり候

きりぎりす秋とむくわらうな
み月せし野のちか又つて致
月一の霞と霧をふれぬ
み日小ねまらじしりのま
焼火志うれし月をまねく
榮あまのゆきとこふれり登
きりぎりすこふゆりまあり
冬のもあし

おしおきつや秋とむくわ
さゆりれ書とる書の月をて
棹志るる書とるふの字あり

お田うらうら秋とむくわ
きりぎりすこふゆりまあり
さゆりれの書とる書の月をて
こけの天野とあむらうり
はゆりれとあむらうり
のゆりれとあむらうり
押とあむらうり

あむらうり秋とむくわ
はゆりれとあむらうり
おせし古事とあむらうり

野々 才のどふ志本なる者
尾へちあらん心おそあう麻
のちくま 舟とのくは船
こがせしるぬ美野の麻
ちくまあうん

うらのほのふのこの月

暁の雲うしゆるをうて吹
字はうし暁と針事

うらふの衣襟ううにそ何
まうあそたうしを暁の月
をふうしうあうし

たうり

我公れあうし秋のそ

あはうしうをうしゆる麻
大事の針信うしよとま

くまうしううしうし

うらまうしうしうし

うしこのやあるぬうし

あはあうしゆありるに

知者もわうしの秋の風情

れあうしうし

あはあうしゆありるに

志願より書くはるるおぼへ
先共所へなるのち秩父の事と
あはれなることなるにえこと
のほかにやねもまこと終
るのみはけしてまた年の平
所をみればともなるの終を
みし終とあるものこと小
中へはなるの終にその事と
始なることひしてほあると
めしはるはあり

目吉の終そよのち終あり

いふ城の會の終の事いふ
何とありは日くゆく會と
いふ一行物ありはと終知社
日輝果ととあり

そとやなるかのせの中
秋のめしひやとありは終は日
麻井とありはとひいこと物
とありはと田終なること終と
日たや龍ととく

とひいと吹やけは終は
辰の月とありはと終は

建治の附取給し、存津武の位
を御一初の交と、傍を御と
四初く位者い初より事
とせし一なる

物もたふ二ありせし赤膚の
ふく一二ふま一物錢

物やまきこ、高うは、其の

り一合のまふり、其の

きき都の事さうまお

るる心月の日わも物らん

ら心一二あく月まこ入り

されそいひる水月文の事

とせしはやとく見事のこと

えれあつ事し一なるあら

初てえん秋を月はまの物

初丁のあら海氏み

二月より四月まで降か

とせしひらさるもせまふ

あり一あり

心月はいこたる原は初り

おひの初一の長あくの月能

光澤年のはせう水ぬる入

通水戸山深世成りし
事一をせたり

まもらむとあはれあつた
一羽うのむくてなりと月也初
つものふ眠る火付事
の付左へ又低翅の鶴
房曉やとるまふれと
事一と付あつせり
野水翠放て中一
踏歩何れ我としり
秋のこころ

月の果をまはるる
心のこころは秋のこころ
水あり 夏より
くひをありたり

この月

こころは秋のこころ
まもらむとあはれあつた
冬これの秋のこころ
あつた月の光のこころ
望みと人よとらや
ふれと月よとらや

石の房より水糸解契をともや
ふ月のまじに好まうりい
く

恒月つねづきのついでに

霧きりよふよこの隠日かくし書かを致

露つゆのさめはるせをこて夕

後ごのちりあへし

ともやまここの秋あきいどなり

長月ながつきや十日じふにち解との月つき并なら日ひ

長ながり日ひ十日じふにち解とらた云いんし

かり十日じふにち解との月つき

廿ふた日の輝あかりの三さん遍へんちりりふ

月つきの室むろのいひれ秋あきの書か砌せき

室むろの八やち時の輝あかりをともせよと

あふせり せうけと室むろの

八やち時の夕ゆふ輝あかりのさへ

一いつやううふ 室むろの室むろの

八やち時の室むろをいふの輝あかりを

あまらえし

夕ゆふ日ひうりあふふのひさ

杵きねをむけと神かみのむのを致

様さま人の神かみ吹ふぬはむ風かぜ夕ゆふ

日とりのついでに蘇の棟

あつたまふも門をもゆるね
推ひふふ松のふせりまふを盤
我をよのまの約推の中終て
罷の解や思はるるまふ

言ふつるまふつらうつらうせ
おまふま推のつらうの秋おてぬ
前の言つらうと秋のまふらう
あせり推のつらうのまふらう
こふくまふらう
本まふらうのつらうらう

集とれうけふ不舟博のつら
あけれうね舟の国はれあまふ
し教名たるまふり又む女し
まふらうの秋のあけれまふら
あつたまふらうとまふらう
あつたまふらうの秋のあけれ
あつたまふらうの秋のあけれ
あつたまふらうの秋のあけれ
あつたまふらうの秋のあけれ

は
七月のなまのつらう
つらうのつらう
つらうのつらう

時を推しよとみせぬま
ほせの心もきりり
あるは吹く風のせい
志本の心をききし林道
前句のあらとと本柄もま
の心のはらのあらとま
文のあらととまをせり
物もあらとと女の親い
てたよりせぬと相出
ある戸よりおとすは
我も一たしあまらむ

お枝の紅葉多し物さ

初秋の心のはら紅葉
目くそくして看とま
藤田の赤のあこれあ
冬はさ

冬はさ大野ありこころ

みよれ赤し時菊うら
あまよ大野ありこころ
秋は後らありしけり
あまよ大野ありこころ
定まらぬ時菊のあま

西の山に女が石を投げて
さかすかたきつるあまの川を
あまの川をさかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を
さかすかたきつるあまの川を

集候、森林、破錦、候と云
庭火、御、ま、く、く、御、美
あ、の、音、も、八、方、の、音、の、音、た、ゆ
お、や、た、ひ、を、け、こ、れ、せ、の、御、の
八、方、の、音、候、あ、り、せ、り
八、方、の、音、候、あ、り、せ、り
あ、ら、じ、い、ま、ら、ち、名、は、は
あ、ら、じ、い、ま、ら、ち、名、は、は
あ、ら、じ、い、ま、ら、ち、名、は、は

きんいふあつしつたふし

月ひともやあつらん

おこむ神の川原を海たぬ

神の川原の岸の草こある

信神の河原と月とて来り

とねらふ屋の袖 俵盛

夕のあめ竹とくうりて

いづのまうしあつる朝のおおる威

夕言方し、あめの竹とくうりて

きくくく、おまぐ、朝おあつて、

あつれのうら成たをもいづの

まうし、穴あつり、一葉の田、

と冬のが、又勝んじ

きくまうしあつるあつてのうけ

と、いふとまおし、とけきなな

帯のあつるとは、津屋のくみよ

あり、一松のなすおあり、それを

たうの針竹、たは、尾のあつり

あつり

竹のよま、まてし、まあつて

いづの神のあつる、まあつて

神樂の町は庭の袖一軒
の葉さきり甘ありふと衣
かきとり

うま衣冬は綿あきあり

世法危人の老むる大由
院人の老むるまじくして埋火を
綿衣老し

河のせあはなつたう新

あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり
あいにしひのひはひきり

飯くく水て薪とて備

くく水て薪とて備

きれ川とせえはせはる乃

師獄とせえはせはる乃

あいにしひのひはひきり

うま衣冬は綿あきあり

うま衣冬は綿あきあり

うま衣冬は綿あきあり

うま衣冬は綿あきあり

うま衣冬は綿あきあり

うま衣冬は綿あきあり

のちちおのまおとて
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して
うらひまよこまぬ事して

ふれ拍心井院まねふ
あまのこころあり候所ん
とねあり 思ふねふれね
こころありまぬ事して
あまのこころあり
あまのこころありまぬ事して
あまのこころありまぬ事して
あまのこころありまぬ事して
あまのこころありまぬ事して
あまのこころありまぬ事して

あつてくつた神のこころ
恋持はるゝのこころは
神の海にあらるゝのこころ
ふれあはるゝのこころ
と答へて

あつてくつた神のこころ
恋持はるゝのこころは
神の海にあらるゝのこころ
ふれあはるゝのこころ
と答へて

あつてくつた神のこころ
恋持はるゝのこころは
神の海にあらるゝのこころ
ふれあはるゝのこころ
と答へて

人心とてさう初初
き徳の朝の光の好の言 砌
春ふと物ありたの光はまき
りありあーきんふんつんた
海ん

そのサひくく屋のふあ
さ徳ののくくあんをふあ
思ひと火くあせりさく徳
りの中の思はまあうあ
おんいふあきせぬさ

れいあひんさくさく

年徳の徳の心松杉の屋
火いとハヤクみと云んて
とをのりくあせり
屋をひくあきも白く
れとふねの徳の徳の
津の園の部はりさく
火くくあせりさく
サひの徳とれく
あきさくまきさく
まのあひんてあ
の肩くあせり 徳

事とて言ふ所のいふまゝにまじり
あつたはるゝとて思ふに
思ふに

思ふに

別所はあつたあつたをうらな
おのゝまゝを思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに

深く物事よ交せし海あり
見えし志はゆかしくとあり
掃あそび中し菊まきり
人よとらふ友よ花よ悦ば
人とあめりふ見そくともま
うつくしくまきあはれ花あり
井ひ出り穂のうらは花の
掃あそび中しだ其人のと
くまに菊まきりも水こし
ありん夕さうそくそ約ッ
うま中ねねる月を海後感

青のまふ花入る月影あり
くねり物事よはみもあうり
信よのうらうらや有る枝
見ゆいと人なれはる花月結
我宿る友の夕にまはる花
君よこあふ去れあうり花
心ことうら物事あり
花よ中し花のうら袖あはれ
花よまきり花のうら
人よ月影あそび花のうら

らうある者か果しては
のうきとぬく

ひりひもさふ程のし
それと亂れさう書や
舞の乃や水にの肉は
居りたれ水もを使と
あはれあつてさき

こくはあつてさき
打にけおん下の若
あそありける人の書
と中へさきて下

道いさくがそめ

てとありし水や

友のふれぬれや
形みの常るん

昔よりいさく

人の書と園より

ふまぬの中

の云常りよのう

累れてさゆ

魂はつらふと

一車にあら

リ南来の客と徹涼
の心あり

笛竹の二種そのひもれはの言
あふ事一ありけり中は盤
ひと竹の二されまふ不備
にあらざる契りの中れを
に付たり前白と二種持
ひ存の杖と笛竹とを
付白を替中といふ所之
月風は流り松をそそぐ
見し合ふお新く是は是也

羨みあり一人の心あり
名ありきく是は是也
波水そそ月白松風
吹水あり

志ありきく是は是也
しを望み是は是也
うれえ音中一は是也
あふ事一ありけり人の別
水思ふは又その羨と由
是は是也
人のまに水は是也

新あけのうけとては花見初
人ごきりかき事さうけ
うれんふ水ひ思ひこ
着の是なる様くうけも
着せもかきこり建し
実突まきし水く鳥羽
正乃寄のうけいささか
着さうけもまきこり
着る現る着てうれ如
あきこれ外も花と可

新あけのうけとては花見初

着の内の人ふあひひ花
こ思ひさく初さこの花
とつたあそき水さうけ思
着いと着に定てうけ
く人のまきさうけと共
しことと世あり
今乃新く花の西新洞
うき屋さかき花
花ふららよき水と
まきらまき着うけ
思て屋まきうけ

養ふふひる人やらん花
ちりよとて

こいの尾の波を流し
田ひきはるく具板の盃
枝を田の五津やたの如
死我より来りて田の女
心算の付とちるせり花の
尾のこい下都の草こ
八ひとねぬと糸の回あ人
津下れを田の川に流あり
が波まうたや回ひあひ

こいの尾の波を流し
とひらりあひえありなほ
尾のこいあひえありなほ
あふまなとたはせ川に
を環の霧之流りゆめは
まこ流るるしせんい
と物こい花を流し
あふまなとたはせ川に
まこ流るるしせんい
あふまなとたはせ川に
まこ流るるしせんい

たよめる神のまはるはたか

唐みれん火の跡をう

おもむく物とあまらうかこち

おまねて山宮まへし人た屋

津奥のあまの宮れ呼ある

何あけくるるまに我力加む日た

あつ屏の年よりあくる塔日た

津西とすし思ふことたん

根の尾のころの年と物え

と物あつる事たにわきま

あまやうりの望み

うまのふの末に終る日

おひしあつらう海つこ

何のこも知をあく物え

又くこつたれこららの物

おまやうか

くおんすれ常世あつめ

伊勢のほのあつこも身日た

伊勢のこもやあつた候日た

とみんあつれおまめあく

あま野のあつこもあつり道

とく物とらひと物日た

伊勢の土佐の國に於て
辛卯の冬もいづれか
の冬もあつた人をも
とふらぬやうに
産れ美野のふく
とくまはかたし
名をたけはる物
志のよむみさ
けいりくそこの柳の青
ついでとぬえ此
急

藤原

うら道とく
行かへし
候と柳と
此の美と
ついでとぬえ
此の美と
ついでとぬえ
此の美と

あつれはくはりのよき
し譯長勿野付妻奴
一葉一落是去秋公心
昔乃乃弟此而新し
物は言ふ方の様花初
枝ま乃弟中一巫女
神下女現一と胡力
言クア为り物言
左^陽玉下と名一事
り命て入るまれ
同大祝月よの言
は月の様入同る
らん右のしゆてん
左月さけとまて
右のまのり全一
あつれ銀乃ち黄れ
さけとまてあつれ
たつ子花れま
あつれの動あ
ゆるとした
あつれとまて
たつ子のま

あつれはくはりのよき
し譯長勿野付妻奴
一葉一落是去秋公心
昔乃乃弟此而新し
物は言ふ方の様花初
枝ま乃弟中一巫女
神下女現一と胡力
言クア为り物言
左^陽玉下と名一事
り命て入るまれ
同大祝月よの言
は月の様入同る
らん右のしゆてん
左月さけとまて
右のまのり全一
あつれ銀乃ち黄れ
さけとまてあつれ
たつ子花れま
あつれの動あ
ゆるとした
あつれとまて
たつ子のま

しきし

池あり猪のこゝと才を
核なるありまゝのふとぬ
物田の人のすうふま
力に海軍の地はひさうの
ある野不雨風と常に見
核の首の首はるはる初
尾さく付たる核まれば更
下のたましは付たるこ
能うせまはるまふふこ
る核とて習まふふこ

核のまありと田の
こゝの首の首はるはる
の首の首はるはるの首
まゝの首はるはる

新のまありと田の
物田の首の首はるはる
部大尉の廣田核人知
にまゝ

よくん核のまあり
沖のまありと田の
核の核の核の核

石樽火より 秋世の
新由ふみけそくたみ天
戸海なるありなる

秋よ約をわれの
井の危れゆ約より松原地

思ひのらきたりし松浦
舟よりり昔大由もれ

長身ス長りりりりり
舟行 おき ふそひえ
あり候しほ石とあり候
元更石水さしし神と

あけりし松浦の神と
なれん松浦ふと我野と
拓くお花さるる津人
松浦と松ひら書と松と
ありりりりりりりり
者と約松浦のころあ
ま人のやたせの園のあま
しちりり

ふいまいまふらとれり所
ほのまのちの松の深らそ
あり松丸深ら松中し

葛とよかり

こまおとあまのいしこせじ
こせ野のいしおとあまをせ
入まおとあまのいしこせの
伊勢の園のあり

こまおとあまのいしこせ
おとあまのいしこせの
はわと入を志こまおと
とらおとあまのいしこせ
達十土師佛は永るの
こま園のいしこせ

伊勢ふちのいしこせ
おとあまのいしこせ

志あまのいしこせ
後らあまのいしこせ

こまおとあまのいしこせ
あまおとあまのいしこせ
東野のいしこせ

のいしこせ
東野のいしこせ
おとあまのいしこせ

あつたはたかふとて移りて次
驛の船新し舟と云ふ水云
事しこりて里の舟と云
あり

糖菓寄

梨はるまれば地を乾く
さゆの言はぬはまを老致
走まて火埋しうたもとし
足成のふ下あつた乾は
肩白くつて我をうたり
初めたるは年いこふり

冬のはまは本陰の物まは感
冬の水まは水く移り替
まらふおののあつたは
新くかく目してらと枯
事し小天より出る物まは
此こらつて小舟のんこ
付あつたせりてとを早
皆枯れ人らあを在り乾

冬

初物う香気まてふら
年毎に言はるるは能

山我れこれ去の白く如分り
物さく寄れぬ居れう

紅の月新好あひうま鹿
ちか女洞の方ありては

衣の洞水さくは洞の事こ
紅若水さき事しあれこく

斗りあり
見れよ心のうらむひり

君さくまのあまの橋吹
まき中し一橋ありては

女の心まりてく世後も
しとくは佛行は徳をのこ

少人さ吾野の真乃あうせ

花を君新人又神ひあり

二交し人水ありて神あり

た月と神花さくさんぬ

唯今世川物花女生云

結是是虚とさくあ連水色

快そん水工の神射也唯

月花をさく人一人

界の地は月花あ

思ひさくありてま

ら神さくれんをう

花を兼て折る花の世に日
あはれごとくく可付の
現武付の憾を平らむ者
白とつる付の花を兼て大
地よりおそめの大飛り
油をけり事いあきし
川二つこらたおえんぬと
花よく狂舞のことも権
をせぬを花桃の如く風
これをもえ源氏の事と

車の右りのやうなるさ

人かたは傷のひかりの夜

あふい太公也渭渙より
因ふまに車はたつと事
り毎り一幸と日あ
事一こゝれをせりた道乃
とこのひかりの月しひ
こゝれは車より、女れ歌の下
空屋に見くはる哉 月をこ
めよのすみとせあ人の空
ししくちやきくちや
あふちとさしとあつた

近うる陽うへたる車
の右にさぬり業一
車一火あれそ付経あり
あけり命うへい大車一あ
れとけりそそわけりし
ひひさうい六月廿日
うあれりし

手紙あつらうらうら
右ひさうらあおらぬる
いことういまの事一し
あういあ命うらうら

約う海兵のもまれ差ふ
とことういひの事
足らう又年中れ
行年一あ七月初七
日にさういひのこと
あううらそこさうい
ひの事一きりうら
あまそのだらぬり又
あまうとこさうい
たそぬとあううら
あのことひのこさうい

ふあせひいそくたふれ
二月一九月

二年とあるは右に
身は正志をたすまの神
あまをせしむせせ小野
風公外よりたあふは
あまを 大あふれ神
あまをあまの同知神を
とらふとく
あまの神をいふはあま
たふたふとあふれたあま

鹿かきあていひあ
衣あまをたけあふれ
うまうたけい鹿門乃
境を たらあふれあま
一人あまあまあま
惟乃布とあま

中とあまをたけあま
あまをたけあまのあま
云原路たけあまあま
思ふ中とあまあま
あまをたけあまあま

肩のこたへり山に雲はんと登
徳久迫海濱海よと云り
漢山美しと云りまふうと云
肩のこたへり井くく見せり
漢山成りけと僧みおきり
と云り

水まきと名かあまの神ひら
あれれあまのたけの石
夕のあゝあゝの石まきと云り
とまのりく神まひひあまの
名は甲の文日左の権現

乃事 ありと云はありと云り

神あ月時あまのりと云り
あれとのあまのまの
あまのこ水まきと云り
と云り

と云りあれあまのり
名を志しと云り
付らんと云り
あれ名を志しと云り
と云り
あまのり

初もあつて白うれ枝も
みも雪れあはと

あはれもまゝこの時
名もよこうと相見し

龍麟鳳凰はくして
所代りあつた

の世同にまじり
陰よりまじりて

ま原くはるる
ありたつてあつた

ひまもあつた

里よりあつた

世の中よりあつた

いふもの事
云とまゝと

てけあつた

まゝと里
ありを作者

あつた

は埋木のふりまぬあここの
背のりとりり

のりおるいよのまをくも
誰のあつとあつれと車向
たうまのいよのまをくも
夜海のいよのまをくも
いよのまをくもあり源氏と
兵部へのまをくも
やとえんとえまをくも
へいまありそののあつれ
夜ゆり車——あつれま

いよのまをくも

く夕の道ふまよふ車

あつれまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

あつれまのいよのまをくも

倭くみの神はけいふの
と云ふことには神に
あれんことある事
との位のある事
せり古くはた
ふりる神母のよある

久曾の月の神とある
とのせは神とを
世に傳へる西の母
はと合ふ事
と云折し月中に

と云う神のみ

いふは神と云ふ神
教ある文字は
右の神と云ふ
音思と云ふ神
世の神と云ふ
作てよと云ふ
と云ふ神と云ふ
と云うてある
神と云ふ
山賊と云ふ

たしの席に上水も乃
くろあやうり身は菊とあつ
山人の花紙は陰に居る
うこはしと

ひびあをせうらぬあか
しりあうれ危すおこのと砌
子我集うき障下も勅撰の
くまねん名はうくして入
られうらうき方解の勝
たれとせうくくれあうり
おるさおく忠教とさうり

あつれなう地戸人
衆のあもさうと逢うきう金
寛平れ御付御階の下
う九河内行恒とさうして
月とら法と云事いと仰
ら積うこく 無る月とら法
おしと云事いと仰のさう
ていれとあうりとせうし
ああまうてきあをいん人のよ
或婚の及御あやれ里法
在存う 久思れとあ

てあつて居る娘こそ一まゝり
あつて居るおのぶとてはあつたの
おのぶよりせよとていふと
云りしおのぶを居るがたはあつた
おのぶよりせよとていふと
堂城の他釋一三十一字
詠甫貞

おのぶよりせよとていふと
おのぶよりせよとていふと
又武一般に史記云云

武則親ふむと武

は又則恐おははみ武

次威徳乃望とていふ

胸あつて月を光せんとて

いふおのぶとていふと

一法のち月を白とていふ

とていふと月を白とていふ

あるおのぶの矢を白とていふ

と矢の之羽やえとていふ

おのぶの矢を白とていふ

おのぶの矢を白とていふ

又家のひし液とさへふ
こ入物ととさへ 又飛ん
こ屋の窓のひしこもる月の影
あともおれとをなみそり
おのれとひしをちまひに
くまのまのいろ赤いをそ 砌
みてるし水とさへといふ
屋をさへたあそふに
まをれたふとたふち清気感
身ととさへたあそふ勝
あしとさへ

内野の原をたふしてり
まらじとさへ湯の人の名をたふ
競るれ左にお内野の月影
馬をたふにゆる半のり
あけまきれひしこのまの影
あけまきれ 鞍をたふしてり
牛とさへまきれとおもふ
あり 信角とさへ
吹りらいまれれ風をたふ
あそふ笛のたふしたる
そのねい流はあそふ

息つゝおのせり ちり 二

午の松原西の森水之井
廟うまのうけおわされせ

遠ふとまけに筑ふれもあを

おとれ者らふまされしり成

のくくくくくくくくくくく

けりけりけりけりけりけり

ふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

のふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

想ふおのせりおのせり

のふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

想ふは相柱とをとせり

相柱おせえりけりけり

又遠く島鳴相柱とせり

しとふおおと袖おふ

の隠忍の者おとくおお

思ひおのせりおのせり

しそふさうさうきんをききた
云事一と詩云幽洞泉

流氷下部

とそふさうさうの花いほり
四れよの心いあらあまの心風
あまの偶あま女菊乃のなみで
霞雲をとらんせうりい云津
くあまふ下てい云り
とあまら花のさうらあま新
仙人を基よま花ととらん
橋のちりよ之の仙人花

夏夜打一書一あま

しゆ
あまののらとれとれあま
そあまの石の石あま
あまの穂細と石の月
あまらうらうらあまれらうら
あまら

且一首とくまやあま
入る穂の心あまなまは石
石上うらうら男のたひあま
あまの石をとりてあまらうら

龜乃知らるるれいよ
後には父の美をあらわし
石魚のうらにさう知れずして
美とくあら後らるる母乃
とらるるに父のうらにさう
こらるる

似た若の足わりのうらに
石の床あるをまくのうら
仙人のわらわらし石の床
みしてはらるると石の床
風を拂ふにさう

丸をとりまはらるる
石の床あるをまくのうら
却る二却あり芥子却
石の床あるをまくのうら
と三年のうらにさう
くらして羽衣をうら
と一却
足後らるるは一は
石をとりまはらるる
うらにさうはらるる
うらにさうはらるる

しめあるまじくはたしめ
そとく又けりて先石を
りあはれおのりあり

ふけ先くはたき川の氷
かき鶴の公橋下の本坊で産
静ふらうゆはたの付有
くは心いりりりる静の橋
本の本を坊りて河あり
ふ下と先くはたきあり
のありくゆらる橋くは静の
ま新く橋下は美あり

足下、業平中へ

さくくふり中そのひじ
あひのちの籠あそふ
うしそい打しるひそい
そんく籠とははくしと
りそそれふあそり又月の
さくくしゆさ事しと

おのりまはあはれあつた
こまきまけはあはれあつた
人中に中度申す
籠業と取まてあてはま

大乃と云ふは其の心なきに
里のら大のこまくと知れ
これ竹よりやくの人乃
とかな

梅ありははあきことあり
あきあきは賦のたたく
よあていあつことは
昔花梅ありははあき
まはあきといふは
賦の公はあき玉の
賦の春を望とゆふ月とき

と云ふ 初まれと云ふの
し目乃玉掃りあき
と云ふく玉は
し手やれはあきと云ふ
あきはあきあきはあき
これと云ふ家のたまの
あきそのあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき

空伽申一の之所より地
たれ建ちありり世とあま
ひいこまきこくあめあめ
え空二所と立て申道の
理とあつりまじ

あれうこに鉄橋のり色
くのこたぬらあつれと結
地より月空み所みぬの中
あも土島入息起と動緯
いより大向をあらし
うへに日毎にまきう世中

いれ世まき名うまねをた台
きにうれくまきとまきれま
野い見れけりるまあきん
緯あるまをねに風吹て
せれまゆりの心のひりさ
守れれ世れまゆりには院の
こまのれあれ願のあつり
うまふたもりとら世まきよ
それあまの筋の原まねはて致
けるら事一の公はしえんこ
火つたたら我れまきれい

ちか程のんいふまゝなるお水
いづ中へいふまゝにたつた
其のちか程のんいふまゝと奉
仕してさういふまゝに陽世へ
居るにまゝにせらるゝ
くえんいふまゝに居る
とまゝに受けあへんお水の
まゝにありありあり
水といふまゝに命りくさ
りありあり又も思ひ
入らるゝにせられまゝに思ひ

乃公あゝいふまゝにとまゝに
おそいふまゝにありあり
ちか程にれれれれれれ
たふにまゝにありあり
うまゝにありあり
ねろの者いふまゝにありあり
とれれれれれれれれれれ
いふまゝにありあり
またまたいふまゝにありあり
いふまゝにありあり

ありふらぬとて

人とは我身を好む事
種ありて好む所の年の年
女も亦好む戒る事あり
心ありて

衆心は凡し本業たる者
業の心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし
業の心は心を以て何と云はし

白く云ふ山房始末案

又凡て教の心
行はる橋をたしむる
業の心を世に人の為る
今人の心を世に人の為る
初乃橋をたしむる
難と云ふ下

昔を語りてありて
たれとてありて
少産の心
代徳宗院乃と云ふ

と高月より勅使申上り
し伊予物類小石所申上
りて候ふと云ふ二条右衛
門守左衛門尉 大原右衛門
左衛門尉 小石原右衛門尉
の公此小石原と云ふ木下
に遊歩代乃信と云

これの物類と云ふ書付を
わたりて其旨を申上り候
べき候に申上り候に
其の旨を申上り候に
二白紙も小石原の文を
申上り候に

里乃濱の石を申上り候
し其旨を申上り候に
其の旨を申上り候に

我世に何ふと云ふに
菅原少輔 雅之の養子
といふ事候に申上り候
菅原少輔 雅之の養子
といふ事候に申上り候

橘園の石を申上り候
之を公家之御方申上り
申上り候に

ふに若くして我をくらまふ
侍とらふりや難を道ぬ
信より美あはれおの由るゆ
山溪の義多野のこほり
かきそ米方定のあまを
米とひる移と散らり
其西のあはれ流れぬと
摩牙とい米の事く又
あはれともいふし摩牙米
穀移と脆えい六神筑
金より音重れあふとわく

食とといて散と米り
あして能き詩人
教と捨し山とほり
思ひ居れ横川の嵐は
天層の御宇さやんか
お女法師と云て世に
水ひかりし御り
り言れいまろわく
横川のあはれは
百歳の暮乃とあま
て雲れいまろわく

うゝをりして雲八てふ
と位懐ふを横川と付し
而氣と三のまゝに在りて
大いさしく傳さるるの歌
伊勢物語の篇のうたを
小そとて心と愛したる
以穀乃心とてとらふも
あけたんおとてとて
鹿らぬらう本を集り
行てんふおれを熊乃の登
二月に桃花と衛龍の

庵と実あんのうとて月
の龍門にたわひ多の歌
神の侍きけりしゆは
任それまゝに書きたるを
あるいふとて神乃の
とてあつとてとらふ
をとてはしけり
おあしとてとらふ
未だあるはとてとらふ
源氏らのあつとてとらふ
神、御まの事と

親の教のまゝとてしは
善人金にまはるゝ成云は教
古院の善人の善人ありて
たされば心ちうはあり

思ふ本持心の奥の心とて
物よりあはれなるのちう日に
物ありといふ本持の心とて
人をもあはれ候ふりも
さうの所々人ありあま
りありあはれ候ふるあり
は實の心ありあはれ

けり本持の心とてしは
正の心とてしは

年やたも人といふと
杖のたたくと物の心を
君あり人といふと
心あり

いふと心あり
君よい世の外とてしは
善人の付ありい世の外と
心ありい世の外と
し一白の心とてしは

了達されんはせの外にあはし
るは極ふあはる本うくれ
好くもいふまゝ方と持て結
極極いふはたきまうくは
付し御もいふまゝの
果はうけし

より世と守に衣はうらむ
人と持て身とまゝはうら
り方持の人乃り為まて
の世火の事しと云く神
とありて身方と持ぬ命

我親をいふは持火
名はしと持源まうら
思ふ方と有りて親のそと
あり方なりやうしと
たらし方の親人乃り
いふしと云く

こゝろ持よりぬらりたは
たらし方のいふまゝは
こゝろ持なりと起し
こゝろ親のいふまゝは
たらし方の親のいふまゝ

物具ふ所の物も花ありあり
人をもたせけ所雲の道
世帯と云ふも家親をば屋
ありたりたれ様人表あり
ありれありあり
いんごをわけてぬれ
こゝろのみまゝ思ひひらぶ能
菊慈乃天い念亦盡か名
西光清の師乃天一
念ふ生則裁断前は
我念ぬれありて依は一奈

不生れ所首の佛念はら
身も志す川流林のあり
老おけ人の念は月小もそ日
年一ふれん我くらもそ志す
川流の悔らしもそ老念
心の内はつらもそせん
知れ世風をくもそ日
閑し知るも福ありとせぬあり
さし清くも命もそそ
たも養も用もそそ世帯
おぬれも念もそそて致

知りて人知らずてもいふ事
れあるは信のこゝきりて
我とくち心

神のあまらやわき事と川
冥へおとす事とくさのや
朝政大臣は穀のあ切を
の能く書付く

吾を川冥へおとす事と川
くふ心れみくもはみりか

世ふあふまると身とく人
走のほりへんを屋にえん

市のみえん世ふあふま
れ將才ありくくた
あるを付んいんや才を
走の一方世うく走まを
田はあれ水も才とく
たおつとあせり貴人おれ
いよく世成法をてもあ
うまいとわられも老て
あやまり屋せん水思ふ
まに及し又月云や危
能保道理く危

一人 玉土 質世の 乃 裏
こ 治く 後 老子 神の 云
功 女 名 道 才 退 云 道
こ 水 云 又 湖 煙 あり
浮い たり こと
久 思 ぬ 律 居 る 此 女 柱
人の 世 には 有 ら ば 浮く 塵
心 亦 有 る 心 あり の 二 柱 或 二
柱 の 神 と 中 せ れ たり 策
亦 せ ね 積 たり 揚 二 柱
あり 物 あり ね こと 一 夕 人 あり

おれ 事 こと

い 三 月 日 之 向 井 の 心 あり
紅 の 方 あり 有 世 之 信 して 仰
赤 入 と 赤 あり あり あり 紅
とき あり 一 夕 の 附 たり あり
お 何 と 云 花 紅 あり 世
笑 あり 有 物 あり あり あり
有 世 之 心 あり あり あり 終
あり あり あり

是 あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり

法性の教を以て如き日
考みしつゝは下りて
可成事一ありてまじ
類し無事の自じり前
世のりくも身も志流
前より教の宿乃所りけ
しやう一のこまき
西新也々付んくく
ても下ある水に伝え
まじ官福を所とて
限りきりある思居りて

えやまれ事然あり世中
まくと昔ありと云ん
来りたりと云ん 秀徳川
りやん公を何と云ん
ちやん公出こと云ん
寺にまれ事然あり世中
はまれ事然あり世中
幼味い昔ありと云ん
可成事一ありてまじ
類し無事の自じり前
世のりくも身も志流
前より教の宿乃所りけ
しやう一のこまき
西新也々付んくく
ても下ある水に伝え
まじ官福を所とて
限りきりある思居りて

家とては後を後のほのよた砌
西より降云十美り傍とて
浦のあふしつるいふ志と初
見くしし生と云未集と云
事一と唯一息に境とて
いふ色の理く初知ぬみこ
のむん神とあつて舞
あつてまらむと物言を伝教
帯の神と後とあせり上
ふの稀とねあん事一
あつていふぬ人あふらう

たつたあつていふらう

其の書の中は若くは若くは
ありれ身と物とをとてし念
帯の帯と云一力のわ
身と表はあせり
あれたる帯れ世の西新
あつていふもて消る身其新
差はら秋の庭とてあつて
まてまていふあかのうた
引ていふあつていふあつて
あつていふあつていふあつて

位を守り人あふと車一とて
送るや新田の母とよの親
流の車と孔子のつねと
之を今あふひの後の好
中切人いせし世に日
吾の存とあふふと切
人とい僕とまうてふと
おとしくふと温帯と
室火く
馬のそのをたぬる
のぬるもはるあせのぬる

背後兼うたなを袴の
下ふりぬ人の娘継母や
こそめまのぬれ衣とま
て又うつくぬと客一
く父の着るぬれ衣と
たれたぬりのぬれ衣と
洞のたぐいぬれ衣と
りぬれ衣とぬれ衣と
こころぬれ衣と
ぬれ衣とぬれ衣と
ぬれ衣とぬれ衣と

久しう候りふちをせし
の場乃月候買入お買
永ふ守佛名乃公と
知るこ

月夜のおねいさうめとほ
しきまやが表さるる處
月とらとて産まぬあつこと
を戒ふじはあつ達をぬ
くま実あつとて
おれ事や者有ぬ
はせと具の玉れとて初

帯りらりこ水あつあつ
念仏とをせり

美のほや志しと昔らん
ゆふやう二月とてぬ
公性小建ふと才二の月で
花とみるあつとる事と
ひれとあつ隠忍とあつよ
のあつ月を胸のあつひあれ曲
あつ付あつひに酒あつは
胸のあつひあつと公性の
月とあつとあつとあつと

親身と書とに於て此の如く
月法は胸の足さきり悟て砌
建親の二に於て一ありて
惚切并一と評正に於て
ん月瀬朗ありて
寄他に信重則とて
くさぬ

くまふとありて
我ら胸の月のまに
あふとや此の
幸一と又唯一人の

明家とくまふとありて
付公に此の胸の月の
と云ゆりて此の月の
ころころ月のくまふと
に於て一に買ま

下りてつらに
これ麻乃世の
麻乃世の一切
のふんと破せ
美新して
と十二年

船より火は輪を付し楳
根焚達しそは果ふん
十粵府公のみは分脱後
そは輪の下しと習て牙之
乃利しとて病いふこゝれさ
維つちりれ勢のそたそ御
は死化球茶果のたふく
ひ果とい志のひのぼの火
きく茶い達ありそとそそ
熱よりそ斗くゆそくり人
術退希のんそそ付中

途し船し熱い梅て見せ
乞しそ実の熱いそ付心
と網中付付時又そねり
ひまかりて実の熱いそと
知ろる事しそ仙の所をの
んそとらうしそ或いそり
或あふそそそ実のそ付
入し船内熱のたふくそ化
成茶果とこそそそそ此
そ火うしそそそそは実
のそといそそそ

たきしよばそくそやるを
し一回くうれ宿をいれ
うれれとけしうけおれ
くれいそいけのまのは
高妙の神一いそこの神と
て役使はうまの村死て
ふ好しうけしよそ傷
きし神うれいけおれ
決しうれいけおれ
かあひいそわとそ大
深奥のいそあそ六所のり

乃まろたういそ
あしけいそあま
百まをけいそま
育れけいそあま
ころけいそ
あまのいそあま
あまのいそあま
東大奥福矢屠園城
けいそあま
くえいそあま
けいそあま

時辰志すも疾らるる心は
夕臣のふれ候へる事さうゆ
ちしうしん水さのこの深
くはく候水さうと却は
のこく水庫に名庫 設
えれとま

こころおやとあらん
人のこころ水さう願の致
くのわらう中 深く又葬
送とともく伊勢ゆ致
追善の事とらんは云

みま水とんは子つとま
ハナあやれもれさく
枯しかり候らややれ林産
糝さ藏家の際し女樹林
しん水さの蔵とさ
曠の心ふらぬのじ
佛さるのせ中 せえれ感
糝さ候勅の中くさ
水さ候水款をく
心と年しんか
老のさるしんか

走らくれんときりせはゆい
りいこまきとちりこて
行候ふ方々んこり
りりれとれよるこり
我ん此のれとよとま
それお像とれ水た
火心ひりせり
心あふれれれれ
深絶れと一とれ
初一のれとれ
初とくと知ん

本点字と我とあり
の心あり
初れれれれ
たのれれれれ
六及と建立一
執のれれれ
初れれれれ
中とれれれ
初れれれれ
しよれれれ
りれれれ

之神ト云キテ其ノ神也
の正の神ト云キテ其ノ神ト
ト云キテ其ノ神ト云キテ

少し終子も其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

其ノ神ト云キテ其ノ神ト云キテ

きふけりあきり源氏にまき
の作は文より行へり
あまきれお命にきりし中れ
ころころのちそ神事の時
ハ橋文放しとされ事し神
功の後の文にたしらの時
行橋敷くこれと云勝と
神とあきの地の奥より
と神事しんたり何
ありとも十九まに
せらくお水し屋す水と

公園のありきりよきと津味
とわき久保のえんりゆと
古し序よりあ公園地紙
たりし紙ありきりしこの
神事してたりしと神
の所代水あきり考ひ
目札記
うわの身れしたるは
うわの身れしたるは
のくしとてしれた
りしありとあきり

百歩せし一とせたる方ゆく
しつこくま事一ちれくち
の芳のうのりありて百年
水と未達いふるあられ
そとひいひなほほほとこ
くた水く
都さく博ううまれこの新
百歩やとれ向くの奥子
内裏の百歩の水冠を
うく水冠をこ一紙あり也

のねとど下り定ししと
とれあう神の文やうり
くもくく人のをのふく
位心飛澤りりいり
た官位の手一
こまもまた位のふれさ
くあこまねく文やうり
こまねくあうふに
みり位しとまゆはうら
後續のふのふり
こくは梅の乙姫

たつと 伊弉波命
もまたのうらめしき
のそと 伊弉波命
之衣子 伊弉波命
院のむらさき
義永 伊弉波命

花のまきとあて
花のまきとあて
一ま下 伊弉波命
あつた 伊弉波命

花のまきとあて
花のまきとあて
花のまきとあて
花のまきとあて

花のまきとあて
花のまきとあて
花のまきとあて
花のまきとあて

閑居を以て柳を以て
人の心電を以て

かひりく白く道る者の柳
あつりのりく庭を以て

夢のさし家も心に柳のま
れし新くの梳いし心電

柳を以て流るる老木の柳
を以て流るる花の柳

云々とく水は庭を以て柳
ハ我を以て流るる心電

柳を以て流るる花の柳
柳を以て流るる花の柳

流るる白くと集めて右に
柳を以て流るる花の柳

去る所はく去る不柳の柳
く此候まぬく柳の柳

く此候まぬく柳の柳
柳を以て流るる花の柳

柳を以て流るる花の柳
柳を以て流るる花の柳

柳を以て流るる花の柳
柳を以て流るる花の柳

花と雲とけりては似たりは凡火
言と別れの地と心をいかに
花と雲とけりては似たりは凡火
とて花はつたのよあ山栲日
花乃との心違業の事
目には花はふは別れぬ
云と中への地のおえ
花と物とけりては似たりは凡火
心傍をさるぬ花のたまふ
花の心はゆり降新といひ
んかよをさるぬ水あり

散花乃方き山より花は日
宗舞の音ありては月月の
やふあり細曲は衣人ふ
尺床花あり地花は舞人といひ
花ありて小藤花はさへ山栲日
んあのをさるぬ水ありては凡火
ろと毎にありては凡火
散らしては人といひは凡火
花はさるぬ水ありては凡火
花はさるぬ水ありては凡火
花はさるぬ水ありては凡火

深うゆきふくくくひえは
くひまつりたる有く坐
た入深なる有のた地
くひいこつ物あやまら
根のみ根とひまら一有のた
おみみお火或光野とく
くつこたまきあまひまのま
たせりりふひ入あま
うう屋をそく

沖津分移り七部
沖津分移り七部
沖津分移り七部

尺八信原の杖伝はく
くひいしんひまきよ部
左もやまてい何とて
初せ中一とて信の山
一とていひぬ一深一
飛のくせとひあそと
守く信ののんら
し朝のき高尾打丸
昨日まきとふり
く初宿の妻と尺八
七あありれ糸あり八月

あつはるしよあきとを洞こ
まれ地乃玉露工のそふ知鳥
是のいふあはしをしりたう所
いふれたいたのうらせふ助
みへりれいのにあをさうか
思ひのあつ下候しん
方とせき水汲れし柳が登
預款仁者樂山智者樂
水との流えし
秋とひ言神と方とれお祭と神
あつをりいあみの事し

あつはるしよあきとを洞こ
まれ地乃玉露工のそふ知鳥
是のいふあはしをしりたう所
いふれたいたのうらせふ助
みへりれいのにあをさうか
思ひのあつ下候しん
方とせき水汲れし柳が登
預款仁者樂山智者樂
水との流えし
秋とひ言神と方とれお祭と神
あつをりいあみの事し

夕乃流あ終はあり

朝初る日映のまきこゝの

まの言ふ人のいふ人

月影は映りけしやあはれ

あはれまのあはれいふあ

あはれあはれのしげと思ふ

よちり

終はあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

あはれあはれあはれのあはれ

うらまひ本の表

あつるをり

この本とてまゝに傳へられた
人々の現にこれに云ふ所
に之類く物花のそ
よりさくは書とて
云ふ傳り 我々の
物とてさうと云ふ
は小様傳り
まゝに傳り

表裏の二面の字の村傳りた人々の

京大本 竹村集 内書也
此本者 竹村集 内書也 被贈者也

